

コモディティ・バブルにも終わりはあるか

米国におけるサブプライム問題に端を発し、世界的な株安が進行している。一方、石油や金などのコモディティ価格は、上昇が続いている。しかし、株や債券と異なり、保有しても配当や利子のつかないコモディティ価格の好調さは、説明が簡単ではない。

確かに、中国などの新興諸国における実需の高まりもあるだろうが、投資先のない資金が集まり値上がりを生じさせる「過剰流動性」が主な要因だとも言われている。

もしも、銀行のバランスシート調整により信用収縮が起これば、投機家のレバレッジ運用コストは高くなる。加えて、米国の景気後退で株が値下がりすれば、更なる値下がりと呼ぶ。投機的資金が急速に市場から逃げだし、過剰流動性相場が終焉を迎えれば、コモディティ価格も高値を維持できないはずである。

海外基金では古くからコモディティなどに積極的に分散投資を図ってきたが、わが国でオルタナティブ（代替投資）に採用されたのは最近のことである。バブルは振り返ってみて、はじめてバブルとわかるのである。投資を開始した時が「コモディティ・バブル」だったと言われる日が、訪れなければよいのだが。

《目次》

- ・ (年金展望台)：公的年金はどのようなリスクに備えるものか
- ・ (公的年金)：基礎年金へのマクロ経済スライド適用廃止に必要な財源
- ・ (不動産投資)：住宅系REITとオフィス系REITの利回り格差の要因は？